

令和元年6月16日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02827

研究課題名(和文)日中韓の新型留学プログラムにおける言語文化教育の在り方と支援方法の提案

研究課題名(英文)The language and culture education for Japan-Korea-China study abroad program

研究代表者

北出 慶子(Kitade, Keiko)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：60368008

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトメンバーの多様な背景を生かし、多分野との連携基盤を確立することでライフコースの生涯発達や異文化理解の学びの具体化など、従来の言語教育分野では捉えることのできなかった範囲の留学経験者の成長についてアプローチすることの意義を提示することができた。また、応用言語学で近年発展がみられるナラティブ探究について国際シンポジウムを開催することができ、国内と海外の言語教育におけるナラティブ研究の動向を共有し、国内の言語教育や異文化間教育の特徴と課題を具体化することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の言語教育的アプローチでは、留学経験を単に言語習得だけの意義として分析していたものが多かった。しかし、本プロジェクトで臨床心理学や異文化間教育のメンバーと共同することで、アイデンティティやキャリア形成、自己認識・他者認識などの価値観の再形成といったライフコースの中での発達とともに異文化経験や言語文化の学びを捉える必要性を示すことができた。特に非英語圏への留学は、言語獲得以外の学びの意義についての評価が重要となり、本プロジェクトで事例として示した非英語圏留学からの学びのアセスメントおよび教育的介入は、異文化経験を通じた学びのカリキュラム検討に寄与するものである。

研究成果の概要(英文)：The project consists of the members from varied disciplines such as clinical psychology and intercultural education as well as the language education. The rich backgrounds across the disciplines enables us to explore the learning of study abroad experiences beyond the traditional concept of learning in the field of language education, which focuses on the acquisition of the target languages. The meaning of study abroad experiences are not limited to the language acquisitions, but should include the re-conceptualization of the beliefs, values, self, others, and careers which impact on one's life course and career development.

研究分野：日本語教育

キーワード：異文化間能力 留学経験 言語文化教育 ナラティブ 社会文化的アプローチ 異文化経験

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

90年代後半からのパラダイムシフトにより、欧州の「複言語主義」に基づいた「グローバル市民」を目指した言語学習・教育に代表される多元的な言語・文化の共存を目指した**社会文化的文脈の中での学びの捉え直し**が叫ばれるようになった。欧州評議会による「欧州言語共通参照枠」(CEFR)の提案について第二言語学習の観点から注目すべき点として、言語学習と異文化間能力を分けるのではなく関連した能力として位置付ける、「母語話者」を目標とした言語知識やスキルの獲得ではなく「他者との関係形成能力」の重視、などが挙げられる。つまり、複言語社会における複数言語の教育は、単に意図を伝えるための手段としてではなく、言語的・文化的背景の異なる人々と共存するための力を育成するものでなければならない(福島, 2014)。

この考え方は、学習者の言語文化背景とは異なる場に身を置く留学という学びにおいても重要な示唆をもたらす。留学は言語使用の機会というだけのものではなく社会的実践である。社会文化的文脈の中での自己変容(アイデンティティ形成)過程と多様性に注目し(Block, 2007)、留学を通じた人間の成長を言語や文化知識の獲得としてではなく動的、包括的に捉える必要がある。

また、英語と非英語言語のその学習意義の違いが顕著になってきている点も重要である。英語のような強力な世界的言語資本(Bourdieu, 1991)を有する言語とは異なり、日本語、中国語、韓国語の場合、その言語を高度に極め学位獲得や就職とまでは目標としない学習者や留学生層も増加している(国際文化フォーラム, 2012)。しかしながら、日中韓間の多くの留学プログラムの言語カリキュラムは画一的に英語圏留学に倣った形で「母語話者」を基準とした言語知識とスキルの獲得が目標とされる傾向が見られる。

### 2. 研究の目的

グローバル化で留学参加者やその形態が多様化する中、留学研究やそのカリキュラムは英語圏留学を参照にしたものが圧倒的である。しかし英語圏留学は、世界的言語資本を持つ英語という言語やその文化を獲得するという目的が強くなり、非英語圏、その中でも特に隣国である日本・中国・韓国の間での留学目的や意義と同じとは限らない。本研究では学際的な連携のもと、日中韓間での留学が参加学生にとってどのような意味を持つのかを長期的キャリア形成の観点及び社会文化的文脈の視点から分析する。その上で従来の母語話者をモデルとした目標言語獲得が主流であった留学による学びを再考し、日中韓間留学の意義とそれに基づいた留学における言語文化カリキュラムと留学を通じた個々の成長を支援する方法を提示することを目的とした。

### 3. 研究の方法

研究方法は、以下の3つからなる。

(1) 連携基盤の確立：まず、連携分野である異文化間教育と生涯発達心理学から本プロジェクトに関連する部分の理論及び実践を知り連携基盤の確立を図った。連携分野である異文化教育や生涯発達心理学の分野から留学に関連する分野の理論的可能性や理解を深めるための勉強会、及びパイロットとして日中韓留学を通じた学びの研究会を開催した。

(2) 実践(調査と分析)：上述のような日中韓の各種留学プログラム参加者へのナラティブ調査を実施、分析し、研究会等で発信、意見交換を行った。日中韓の各種留学プログラム参加者に留学前から現在までの「ライフストーリー」(桜井, 2002)を語ってもらい、事前調査で有用性を確認したナラティブアプローチに有効であるTEA(複線径路・等至性アプローチ)(サトウ&安田, 2013)で分析を行った。

(3) 応用(研究結果の発信と教育的応用)：TEA(複線径路・等至性アプローチ)を活用した省察実践を設計、実施し、その精緻化を図った。省察実践の中から公開承諾を得た例を事例集としてまとめ、HPにて発信し教育的応用ができるように工夫した。最後に、研究の総括として現行の留学プログラムが採用している言語教育及び異文化教育カリキュラムの目標を分析結果をもとに再考し、その具体的アセスメント方法を検討すべく研究会を開催した。

### 4. 研究成果

#### (1) 連携基盤の確立：

##### 他分野との連携

本プロジェクトメンバーの多様な背景を生かし、多分野との連携基盤を確立することができた。まず、文化心理学および臨床心理学においては、経験の語りからの意味付けと学びを促進するというナラティブのアプローチについて学び、研究方法および教育実践として言語教育でのナラティブの可能性を見出すことができた。日本質的心理学会やTEAの国際学会などでのシンポジウムやパネルなどの企画を通じ、言語学習者をライフの視点から捉えるライフキャリアの視点を学ぶことができた。次に、国際教育との連携においては、教学実践フォーラム「留学を通じた学び 支援およびアセスメント」を共同企画し、留学などの異文化経験が個々の価値観の更新、柔軟性、寛容性、多様性への理解といった学びに繋がることから異文化間教育分野で実践されている目標、活動、アセスメントの事例から言語教育に活用できる観点を見つけるこ

とができた。また、日中韓の留学というキャンパスアジアを運営している東アジア研究の教員との連携により、キャンパスアジア参加学生へのインタビュー協力や教育的活動導入を実現することができた。

#### 応用言語学分野内での国際的連携構築

他分野ではないが、日本語教育だけではなく応用言語学におけるナラティブ研究の基盤構築と発展ができたのは、予定外の成果であった。2018年11月に「言語教育におけるナラティブ」として国際シンポジウムを開催し、応用言語学のナラティブ研究の一人者でおられる Gary Barkhuizen 教授を招聘し、日本語教育におけるナラティブの研究者とパネルディスカッションを試みた。本企画で国内と海外の言語教育におけるナラティブ研究の動向を共有したことで、国内の言語教育の特徴と課題を具体化することができた。

#### (2) 実践(調査と分析):

異文化経験からの学びを具体化するために、日中韓キャンパスアジア留学経験者と英語媒介プログラムで来日した中国人留学生、という2つの調査を行った。どちらもナラティブ探究を用いた調査で少人数ではあるが、丁寧に個々の経験からの意味付けと学びについて何度も語りを重ねてデータを収集した。どちらの研究も当事者の留学を通じた学びの長期的変化に特徴が見られた。については留学経験の意味付けについて参加前と参加後の違いが浮き彫りとなった。帰国後、就職活動というライフコースの移行期を経験する中で、日本人学生にとっての非英語圏への留学経験は、留学先で得た言語能力ではなく多文化経験が焦点化される例が見られた。また、については、日本に留学しながら日本語は必要ないという考えだった留学生が4年間の大学生活でキャリア観や将来像が変化し、日本企業への就職を目指すという例が見られた。大学時代は、ライフコースでいう青年期から次への移行期にあり、大学時代の留学経験や言語学習は、キャリア構築やライフステージも視野にいれた研究や教育が必要となることが明らかとなった。

#### (3) 応用(研究結果の発信と教育的応用):

##### 成果発信

上述の2つの調査結果については、は2016年に国際学会で発表したのち、2018年に論文として掲載された。については、2017年に国際学会で発表し、さらにデータを加えて留学経験者の長期的変化を明らかにし、これから論文として執筆し、学会誌に投稿する予定である。また、留学経験などの異文化経験への当事者の意味付けに着目したナラティブのアプローチについて日本語教育および国内の言語教育でも広がりを見せており、本プロジェクトによりライフストーリーや社会言語学的ナラティブの研究者と連携することができ、図書出版に向けて企画を練っている。さらに、本プロジェクトの成果発信として「異文化経験と学び」のHPを設置した。留学をはじめ、海外赴任、海外滞在、など、新しい価値観との出会いと学びの関係を広く捉え、本HPでこのような異文化経験を通じた学びとは何か、それはどのように提供・支援できるのか、そして成果はどのように測るのか、といった点について言語文化教育、キャリア教育、文化心理学、発達心理学などの分野との連携によりアプローチしていく研究の発信をしていく。

##### 教育的応用

留学経験の学びを促進し、深い学びへ繋げるために体験をピアと語り合う、ジャーナルに書くなどの言語化活動を日中韓キャンパスアジアの1週目留学と2週目留学の間に導入した。留学1週目を終え、同じ形式の2週目の留学に入る前に上述のナラティブをカウンセリングに用いているTEM(複線径路・等至性アプローチ)を用いた活動を教育的介入として実施した。この活動を経て2週目の留学に行き帰国した学生たちへのインタビューを2019年に実施し、この教育的活動の効果について検証していく予定である。また、2018年には学内の第4回教学実践フォーラム「留学を通じた学び-支援及びアセスメント-」でメンバーの堀江氏とも共同し、留学のような異文化経験の学びの支援方法やアセスメントについてシンポジウム形式で発表した。異文化経験の学びの意義は認知されつつあるが、そのアセスメント方法の検討が急務であることが明確となった。この点について“Beliefs, Events, and Values Inventory”(BEVI)という価値観の変化を測定するために開発された調査方法に着目し、開発者を招聘して研究会を開催した。

##### 次のプロジェクトへの発展

本プロジェクトの成果から発展・派生し、2つの次なるプロジェクトに繋げることができた。1つは、「生活者としての外国人」への日本での生活や日本語支援といった異文化経験ボランティアを学びとしてどのように位置づけるかという点への着目である。この点については、地域支援ボランティアと正課の学びを結び付けているサービスマーケティングの観点を踏まえ次の科研プロジェクトとして採択が決まった。もう1点は、上述の異文化経験による学びの客観的測定方法の1つとしてBEVIを用いた測定である。この点は、国際共修プロジェクトやBEVIを取り

入れた異文化アセスメントとして別の科研のメンバーとして進めていく。

## 5. 主な発表論文等

### [雑誌論文](計7件)

- 三代純平・北出慶子・嶋津百代 (2019). ナラティブの可能性 語りの社会的意義 『言語文化教育研究』(16巻) p.1. 査読無
- 斎藤進也・安田裕子・隅本雅友・菅井育子・サトウタツヤ(2019). 質的データの可視化支援ツール「NARREX」の開発 KJ法経由のTEMとそれをサポートする方法について. 『立命館人間科学研究』 38. 111-120. 査読無
- 北出慶子(2018). 韓国・中国留学経験の意味づけと就職活動 言語資本から非英語圏留学の学びを考える 『立命館経営学』(56巻5号). 115-135. 査読無
- Emiko Yukawa & Miki Horie (2018). Local Students' Views of English-Medium Courses in a Japanese Context. 『立命館高等教育研究』.18.93-109. 査読有
- 庵道由香(2018). 東アジア共同運営高等教育プログラム構築の試み 立命館大学文学部キャンパスアジア・プログラムの事例 『立命館高等教育研究』.18.43-58. 査読有
- 北出慶子(2016). 「書評論文：ライフストーリー研究の新たな枠組みへ 三代純平(編) 『日本語教育学としてのライフストーリー 語りを聞き、書くということ』リテラーズ(19巻1号).52-65. 査読有.

### [学会発表](計24件)

- Keiko Kitade (2019). The development of Trajectory Equifinality Approach (TEA) in Applied Linguistics. The 1st Transnational Meeting on TEA.
- 安田裕子(2019)TEA(複線径路等至性アプローチ)の可能性 「発達」と「文化」をとらえるということ.The 1st Transnational Meeting on TEA.
- Keiko Kitade (2018). Career development of a female college student who decided not to become a Japanese language teacher: Life transitions and ideologies. The 10th International conference on the Dialogical Self.
- 北出慶子(2018). 国際共修授業のアセスメント 担当教員のビリーフと授業設計 .CAJLE/ACELJ 2018 カナダ日本語教育振興会年次大会.
- 北出慶子(2018). 人の生の歩みとその可能性を拓く「応用言語学における TEA/TEM の広がり」. 日本心理学会第82回大会.
- 北出慶子(2018). 日本語教育とナラティブのインターフェイス「日本語学習者・教師のライフの広がり」とナラティブ」.日本語教育学会秋季大会.
- Yuko Yasuda (2018). What happens on 'Bifurcation Points': Based on the methodology of Trajectory Equifinality Approach (TEA). The 18th International Society for Theoretical Psychology.
- 安田裕子(2018). 人の生の歩みとその可能性を拓く 潜在的な分岐を可視化・実現する、文化心理学に依拠する質的方法論 TEA. 日本心理学会第82回大会.
- 北出慶子(2017). 「英語圏に留学すべきだったのか？」 就職活動を通じた韓国・中国留学経験の再評価 . 言語文化教育研究学会年次大会.
- Keiko Kitade (2017). Impact of the local language on identity development among international students in an English-medium instruction program. International Society for Language Studies.
- 北出慶子(2017).TEMで広がる社会実装 言語を学ぶ・教える .日本質的心理学会年次大会.
- Keiko Kitade (2016). Should I have chosen an English speaking country, instead? Re-evaluating Japanese students' study abroad experiences. International Society for Language Studies.
- 北出慶子(2016). 「何が語られたか」と「どのように語られたか」-複数回に渡る語りの解釈 .日本質的心理学会年次大会.

### [図書](計14件)

- Miki Horie (2018). Faculty Training for Non-Native Speakers of English at Japanese Universities: Effective English-Medium Teaching for a Culturally Diversified Student Population. In Bradford, A. & H. Brown (Eds.), English-Medium Instruction in Japanese Higher Education: Policy, Challenges and Outcomes. 328(pp. 207-224). Multilingual Matters.
- Keiko Kitade (2017). "Readings in Language Studies". 326(pp. 15-38), International Society for Language Studies.
- 北出慶子・安田裕子・サトウタツヤ編(2017). TEMで広がる社会実装.239(pp. 48-68). 誠信書房.

Yuko Yasuda (2017). How can the diversity of human lives be expressed using TEM?: Depicting the experiences and choices of infertile women unable to conceive after infertility treatment. (Sato, T., Mori, N., & Valsiner, J. (Eds.), MAKING OF THE FUTURE: The Trajectory Equifinality Approach in Culture Psychology. 220(pp.55-65). Information Age Publishing.

安田裕子・サトウタツヤ (編著) (2017). TEM でひろがる社会実装 ライフの充実を支援する. 254 (pp. 11-25). 誠信書房.

坂本利子・堀江未来・米澤由香子 (編著) (2017). 多文化間共修: 多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する. 75 (pp. 23-50). 学文社.

〔その他〕

ホームページ

「異文化経験と学び」HP の設置

<http://culture-learning.com/>

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名: 安田 裕子  
ローマ字氏名: Yasuda, Yuko  
所属研究機関名: 立命館大学  
部局名: 総合心理学部  
職名: 准教授  
研究者番号 (8 桁): 20437180

研究分担者氏名: 庵造 由香  
ローマ字氏名: Anzako, Yuka  
所属研究機関名: 立命館大学  
部局名: 文学部  
職名: 教授  
研究者番号: 70460714

研究分担者氏名: 堀江 未来  
ローマ字氏名: Horie, Miki  
所属研究機関名: 立命館大学  
部局名: 国際教育推進機構  
職名: 教授  
研究者番号: 70377761

### (2)研究協力者

研究協力者氏名: 久保田 竜子  
ローマ字氏名: Kubota, Ryuko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。